

『雨』あめ

作者 浅羽
一

雨はもう、止んでいた。

水を吸ったベンチは、青白い街灯の明かりだけを受けて暗い公園の片隅で浮かんでいる。その公園に、他に休むべき場所はない。休んでいる者もない。

地肌がそのまま露出した地面。濡れた土は変色し、さらに夜の色を濃くしている。そこに散らばる細かな砂利は、文字通り冷たく肌に刺さって神経を麻痺させようとする。

このままでは、凍えて死ぬかも知れない。

だから彼はそこを出て、跳んだ。

ベンチの下は多少なりと雨滴を免れていたものの、冬の地面はやはり容赦なく小さな体からさえ温もりを奪うから。未だに濡れているとは言え、まだベンチの上の方がマシだった。普段は硬いはずの木が、この時ばかりは僅かに柔らかく感じられた。

己の中に潜り込む様に体を丸める、ほんの些細な隙間さえ拒んで尻尾まで巻き付けて。途端、鼻から吸い込む空気が嗅ぎ慣れた匂いと共に温もりを帯びて、体の中を降りていく。それは結局、たった一人、自らのものだけでしかないはずなのに、ほんの少しだけそれまでよりも寒さを忘れる事が出来た。

静かだった。

眠ってしまうには、あまりに寒く。安らぐ為には、あまりにも空腹で。だからこそ、せめて今少し、後少し、雨の名残がかすれるまでは、このままじっと体を休めておく。夜明け前になれば、嫌でも動かなければならなくなるのだから。太陽が昇り、やがて沈み、そしてまた昇る、そんな間の命を繋げる為の糧だけを求めて。動き回れば少なからず寒さも紛れるが、一時の誤魔化しの為に無駄な体力を使うわけにはいかない。

延々と、淡々と、日々繰り返される光景は、果たしていつから続いているものか。少なくとも彼はそんな事など覚えていなかったし、ましてや興味すらなかった。気付いた時にはもうすでに、彼は「彼」であったし、だとすれば最早それだけで十分だったからだ。余計な思考は、無価値どころかむしろ害悪だと、彼は知っていた。

生きる為に必要な事以外は何も考えず、その為に必要な最低限度の行為だけをする。本当に、それだけで十分なのだ。いや、それこそがつまりは最も必要な事なのだ。ただ、生きる。その生存本能を叶える為にとつては。

余計な思考は願望を生み、それはやがて生物として当然の欲求を容易く越えて、麻薬のごとく脳を冒す。その先に絶望が待つと分かっていたいながら。

叶えられるはずもない願望は、そしてやはり満たされる事の無かった現実は、最後は濁った澱となつて意識の底に溜まつていく。そうして体は重くなる。

冷たい世界だ。決してマイナス何度にまで及ぶ極寒の世界だとは言わないけれど。いわば温度のない世界なのだ。ただ、それでもやはり「0℃」と言うのは、水さえ凍る冷さで。

だとすればこそ、そんな世界で鈍重な体は、危険から逃れる為のものとしてあまりにも不都合すぎるから。だから可能な限り体を軽く保たねばならない。そしてだからこそ、必要な余計な思考や願望ではなく、諦観であり、無視であり、いつそ真に虚無的な心なのだ。虚しいという事を「虚しい」とさえ感じない様な。そうでなければ、いつか足を取られて倒れてしまう。誰かが手を差し伸べて助け起こしてくれるだろうなんて、最早、願望でさえ浮かんでこない戯れ言だ。

どれほどの時が、それから経過したのか。短かったのかも知れないが、ひたすら動きを

止めている身にはやけに長くも感じられた、そんな程度の時間。

不意に、鼓膜に自身の鼓動以外の音が届く。

即座に彼は顔を上げた。ただし、顔だけ。体まで動かすのは状況を理解してからだ。彼の耳は、「それ」がまだ離れている事も教えてくれている。

公園の入り口、そこからやや中に入った辺り。街灯の明かりにぼんやりと浮かんでいたのは、一人の人間だった。

彼はそれを黙って見つめる、決して目を逸らすことなく。

すると、闇に浮かぶ二つの光点に気付いたのか、人間はたどたどしい足取りであったものの、着実に彼の方へと近寄ってきた。街灯の明かりの隙間に入れば互いの姿さえ不確かなものになる世界で、けれど確かに彼と人間の目が合った。

彼は逃げなかった。とは言え、いつでもそこから走り去れるよう、足に力を入れる準備だけはしていた。濡れた土を叩く足音が、徐々に大きくなってくる。

一步、また一步。滑る様にと言うのではなく、むしろ単発的な感じで歩を進める人間。彼の視界で跳ねた泥が踊る。

やがて、遂にその人間がベンチの手前にまでやって来た。まだ年若い女だった。

彼は空を仰ぐ風に、自らを見下ろす瞳を見上げた、真っ直ぐに。

女はしぶ濡れだった。傘は持っていないなかった。

彼は思った、人間はやはりおかしなものだ、と。

彼らはいつも、暑い夏でさえ、ただの布が濡れるのを嫌って、窮屈な世界に自分達を押し込めるのに。なのに、こんな寒い夜に限って、体中を雨に濡らして歩いている。細い足にスカートがまとわりつき、白い頬には傷痕さながらに長い髪がへばりついていて。雨の残り香の隙間から、かすかな香水の匂いが彼の嗅覚をくすぐってきた。

彼はまだ、そのままの体勢でいた。危険は感じなかった。と言うか、僅かでも危険を感じていればすでに走って逃げていた。安全だと軽々しく認めるつもりもなかったが、それでも特に害があるとは思わなかった。

いや、もつと正確に言うのなら、違った表現こそが妥当だったのかも知れない。そもそも彼はその女に対して何も感じなかった。敵意も、安心も、何も感じなかった。物理的な感覚を捨て去ってしまえば、女はまるでそこに存在すらしていないかのごとく錯覚させてくる、そんな虚ろな雰囲気だけを纏っていた。

ただ、当然と言えば当然の事であったのだが、彼はすぐにそれもやはり所詮は単なる錯覚に過ぎないのだと悟っていた。彼の瞳は捉えていた。華奢な体の側面に力無く垂らされた両腕、その先端。防寒衣と呼ぶにはあまりにも寂しいジャケットの袖から伸びる、女の手は、確かに指先が震えていた。

彼は立ち去ろうと思った。女が現実存在する人間であり、そしてまた一向にそこから消える気配が無いというのなら、彼にとつて取るべき行動など一つしかなかったのだから。彼と人間では、生きる世界こそ同じだとしても、あまりにも生き方そのものが違いすぎる。

女は相変わらず、黙って立ったまま彼を見下ろしてきていた。

と、彼が音もなく体を持ち上げた、その瞬間、それは唐突にと言うよりも、おそらくは「反射的に」と言うべきなのだろうが、女が彼に向かって手を伸ばした。ただし、それは勢いなどほとんど無い、おずおずとした動作であったけれど。いっせ、触れたいくせに、

触れる事を、もしくは触れようとする事を恐れているのだと言われれば、納得出来そうな仕草だった。

だからこそだろう、彼は咄嗟に飛び退く事をせず、じっとその手の行方を窺いながら、待った。

するとゆつくりとながらも、確かに、女の指が彼の頭へと伸びてくる。指先は、やはり今も尚、震えていた。

不意に彼が声を上げた。紛れもない威嚇の声だった。いくら敵意が感じられないとは言え、気安く体に触れるのならば、その柔肌を鋭い爪で切り裂いてやろう、そんな意思を明確に載せたものだった。

一瞬、女の手が弾かれたみたいに跳ね、再び少しだけ距離を取る。そしてそのまま、離れる事も近寄る事も出来なくなったのか、空中で静止した。それはまるで、生き方を見失い、願う事も、諦める事も、どちらも出来ぬまま途方に暮れて立ち止まってしまふ事しか選べなかった者のごとく。その手に視線を移した彼の眼前で、女の指が凍りついていた。彼は待った。もしかしたら、この人間は彼に恐れを成して逃げてしまいかも知れない。いや、仮に理由こそ違えど、それでもじきにこの場から姿を消してくれるかも知れない。彼みたいに冷雨と泥にまみれた野良猫の爪など、人間にとっては忌避すべき対象でしかないはずなのだから。それに何より、彼は叶うなら、今はまだこの場から離れたくなかった。

そこで彼は女の手を睨み付けたまま、もう少しの間だけ辛抱強く待とうとして……。

……その時だった。唐突に、雨が、降ってきた。

彼は、いきなり視界を縦断していった一粒の水滴に、状況も忘れて思わず憂鬱な気持ちで芽生えるのを自覚した。また雨が降るのか。今度は、いつ止むのだろうか。

そして、そんな事を頭の片隅に浮かべながら、彼が女の指から一瞬だけ視線を外して空を見上げると……。

しかし、空は相変わらず濁って暗く、静かなままだった。新たな雫が空から降ってくる気配はなかった。

彼はようやく気付いていた。透明な水滴は、空からではなく、彼を見下ろす女の瞳からこぼれていた。女は声もなく泣いていた。

「……………」

と、不意に女が何かを言った。

彼はそれに、人間はやはりおかしなものだと思った。ずっと人間に飼われてきたわけでもないどころか、ほとんどまともに接したこともないただの野良猫に、人間の言葉など通じるはずがないのに。だから彼は鳴き返すどころか口を開く事さえしてやらずに、自らを見下ろす濡れた眼差しを見返した。

女は、またしても何言かを発した。まるで、彼に己の言葉が伝わっているのだと錯覚して、いや、いつそ勝手に確信しているかのごとく。伝わっていた事など、その女が野良猫である彼以上に無知であると言う事だけであったのに。ほんの僅かに、女の指が彼に近付き、すぐにまた停止した。

彼はいい加減に煩わしくなってきた。もう一度、威嚇の声を上げようと思った。そうすればきつと、この蒙昧な人間も自らの愚行に気付くだろう。

だが、その為に彼が口を開こうとした、その寸前。

彼は見た。

そして、驚きも通り越して呆れてしまった。それは、彼にとってそれまでで一番、理解しがたい行為だった。女は、やはり静かに泣いたままで、笑っていた。

最早、「おかしなもの」にもほどがあった。泣くという行為は哀しみの感情の発露だ。笑うという仕草は楽しみの感情の顕現だ。それらは相反するものであるはずで、互いに対極に位置すべきものはずだ。いくら同じ「感情」という名を冠されていても、それはあまりにも在り方が違いすぎる。

だからこそ、彼は戸惑った。

獣にも感情はある。野良猫にだってそれはある。それが人間だけに許されたものなどと決めつけている者がいるとすれば、それこそが人間の傲慢さと浅はかさを証明する愚考であるのだ。

けれど、少なくとも彼は知らなかった。見た覚えも無かつたし、ましてや自ら経験した事など明らかに皆無だった。笑った事はあった。泣いた事もあった。それでも、笑う時は「笑うべき時」で、泣いた時は「泣くべき時」だった。だから、こんな曖昧でややこしい状態に触れるのは、初めてだった。

彼は思った。この人間は楽しんでいるのだろうか。なるほど、だとすれば笑顔の理由には最適だ。

彼は考えた。この人間は哀しんでいるのだろうか。なるほど、だとすれば涙の理由としては順当だ。

結局、彼は納得した。人間と猫では「違う」のだと。そして放棄した。余計な思考など彼にとって無用の長物だったから。だが…。

「……………」
それなのに。そのはず、だったのに。彼はどうしてなのか、やはり自身でも分からないまま、その場を動こうとせず。ただ黙って、彼にとっては意味を成さない女の言葉を聞いていた。

彼は密かに、感じていた。その本質など相も変わらず理解不能のままであつたし、そもそもそう感じた理由さえ明瞭なものでは無かつたけれど。それでも、ただ、何となく、彼の胸には感じられるものがあつた。

：分かつていた。頭ではとづくに分かつていた。生きる為に必要な事が何なのか、生きる為にこそ不要なものが何なのか、彼は今さら改めて考えるまでもなく、最初からすでに悟りきっていた。

なのに、それなのに、もう手遅れなのかも知れなかつた。なぜなら、彼は感じてしまっていたのだから。考えたり、理解したり、そんな手間を重ねる暇もなく、直接に心で感じてしまっていたのだから。

現に、彼の体はいつの間にかとても重たくなつていて。まるで動いてくれなかつた。逃げなければならぬと、これ以上ここにいてはならないと、意識の片隅で冷静な声が何度も言うのが聞こえていたのに。

なのに彼の体は動かない。まるで動いてくれはしない。：ただ、一箇所だけを除いて。

「……………」

彼はまるで女の声に応える風に、体を動かした。唯一動かせる、右の前足をそつと持ち

上げた。爪は全てしまっていた。

唐突に、女の声が止んだ。それから大きな目で彼の「手」を、自身の手に伸ばされつつある彼の前足を見下ろし、呆然と立ち尽くすように動きを止めた。

その時になって、彼は今さらながらに思い出していた。自分は、何と馬鹿な事をしていのかと。その女が、薄汚れた野良猫の爪を恐れる人間が、彼に触れてくるはずがない。彼もまた人間から触れられるのを嫌うのと同じく。

やがて彼はそう悟ると、すぐにその前足を引つ込めようとして……。

：驚いた。不思議と嫌悪は無かった。恐怖もなかった。女の手が、やはりおずおずとではあったけれど、彼の前足をそつと掴んでいた。

女の手は、彼の体以上に冷たくて、まるで氷みたいで。彼の細い前足に小刻みな震えが伝わってくる。女の瞳の中に、丸く光る目が二つ、浮かんでいる。

何故だろうか、彼はもう逃げようと思わなかった。逃げる必要が感じられなかった。

ただ、その代わりにふと思った。彼の身体は冷たい。女の手も冷たい。だとすれば、このままではいつまでも冷たいままでいなければならぬ。途端、彼はそれ以上の深い思考を待つこともなく、最早、単なる本能的な反射に近い感覚で、一つの結論を導き出した。冷たいのなら、温めればいいのだと。寒さを忘れる事など叶わなくとも、それでも仄かな温もりを感じられる程度には、それは可能だと。

彼は、舐めた。冷たく凍りついた白い手を、ちろりと舐めた。あまりの冷たさに、思わず背中が逆立った気がした。

ざらついた舌の感触に、女がくすぐったそうに目を細めた。それからほんのかすかに笑った。

だから彼はもう一度、舐めた。今度は、そんなに冷たいと感じなかった。

と、女が膝を曲げて体をかがめてきた。一気に女の顔が近付いてきて、彼は思わず少しだけ身を引いた。いつの間にか、女の涙は止まっていた。

女がもう片方の手も伸ばしてくる。その指が、軽く弾く様に彼の髭をくすぐった。それは決して不快でないが、かといって快感と呼ぶにはあまりにもあやふやな、とてもとても不思議な感触で。正直、少しだけ煩わしかったけれど、それでも彼は結局、女の好きにさせた。

女の手が彼の体を優しく抱き上げ、代わりに女がベンチの上に腰を下ろす。彼は女の膝の上に座らされる。そして何が楽しいのか、好き勝手に彼の体を触り、撫で、くすぐってくる女。彼はもう、それらの全てに抵抗しなかった。辛うじて喉を鳴らすのだけは踏みとどまったけれど。ずぶ濡れの衣服の気持ち悪さには、すぐに慣れた。

「……………」

女の言葉など彼には分からない。人間の言葉が野良猫に通じるはずもない。

だからそもそも、それが女の独り言なのか、それとも彼に向けての言葉なのかさえわからない。けれど、だからこそ彼は聞いていた。言葉ではなく、女の声そのものを聞いていた。それが何故だか、妙に耳に心地の良い音色だったから。

暗い夜だった。空は雲に覆われて、月どころかかすかな星の欠片さえ見えない。

寒い夜だった。風を遮る壁もなく、寄せ合う身からは細かな震えが止まらない。

それなのに、女は口を開いて白い吐息を生み続けたし、彼は僅かに身をよじったとして

も柔らかい膝の上からどかなかった。時折、女が膝をすりあわせ、彼の視界が揺れる。その度に彼は小さくしやみをした。

本当に、おかしな夜だった。だから彼は、そんな事実には呆れていた。同時に、そんな夜もたまには悪くないのかも知れないと、頭の片隅でぼんやりと思っていた。ただ、そんな考えを抱いたのが初めてだと、気付いていなかった。

女の声は、いつまで経っても止まらない。

●

あの奇妙な夜から、もう三日。彼の命は今日もまだ、繋がられている。

そもそも、何の為に紡がれる日々か、何処へ向けて続けられる時間か。彼はそんな事を考えたりはしない。ただ、生きていく。それが目的で、それが手段で、それが理由でもあるのだから。その果てに何があるのかなど、余計な思考の最たるものだ。

そして彼は今夜もまた、いつもの公園のベンチの上で体を丸めている。なぜなら、それは当たり前前の事なのだから。そうやって、もうずっと前から彼は夜の大半をこの公園で過ごしてきた。それ自体に理由などは特にない。強いて挙げるのなら、他にいくべき場所を持つていないから。それ以上でも、それ以下でもない、はずだった。

だからこそ、彼は待つてなどいなかった。仮に誰かにそんな事を言われた所で、小さく鼻を鳴らす事さえせず、ましてや頷く事など有り得なかっただろう。その代わり、もしかしたら万が一程度の確率で、彼が此処にいる時にあの女も再び現れる、そんな些細な偶然を、絶対に起こるはず無いと否定する事もまた、しなかったらうけれど。

空は相変わらず鮮やかな漆黒と言うよりも、濁った汚泥めいた闇色で。風はそつと頬を撫でていくどころか、一吹きごとに肌を切りそうな冷たさだ。雨は降っていないけれど、いつ降り出した所でおかしくもない。ただし、それが雪に変わるには、まだほんの少しだけ時期が早い。

肺に吸い込む空気は、自らの体温と匂いに染まっている。鼓膜には直接、心臓の鼓動が響いてくる。冷たさに慣れた顔もいつしかふやけて柔らかくなってきた。しかし相変わらず、いや、そんな温もりを感じてもいるからこそ余計に、冷気に晒された背中の中の寒さが酷くなる。どれだけ固く自らの体を抱き丸めても、背中にまでは温もりも届かない。

と、唐突に強い風が吹き、彼の体毛を無遠慮に逆撫でた。それはまるで死人の手に触れられたかと思えるほどの冷たさで、彼の背中も反射的に硬直した。

その瞬間だった。ほんの刹那、彼の脳裏にあの夜の光景が閃光のごとく瞬いて、消えた。それは、あの女が好き勝手に彼の体を、そして背中を撫でていた時のものだった。記憶につられて、妙なくすぐったさが背中を走った。すると、そのおかげか、凍りついていた筋肉が少しだけほぐれていった。

だけど彼は、それでも尚、何も考えようとしなかった。そんな過去の記憶も、現在の感覚さえも、無視し続けた。無意識の内に浮かんだものなど、そのまま意識しないように努めた。

詰まる所、彼はやはりいつもと同じ様にそこにいて、いつもと同じ様にそこにいようとした。諦観を矛に、無視を盾にして、生まれ出でる一切を突き放し遠ざける。変わったものなど何一つとして存在してはいないはずだった。

やがて再び暗く静かな時間がやってくる。誰もいない、誰も来ない、何も無い時間。それはきつと平穏なのだろう。なぜなら味方はいないが敵もないのだから。だからきつと有益なのだろう。生きていく為に不要なものさえもないのだから。

満足など無い。出来るはずがない。けれど、不満もない。だとすれば、それは不幸でもないのだ。「0」の意味など、頭に浮かべる価値もない。

と、その時だった。不意に、彼の意識に耳から伝わるものがあつた。人間の声だった。彼は即座に顔を上げた。逃げはしなかった。逃げるのは状況を把握した後で良い。彼はただ、未だ離れている声の方へと目を凝らす。

およそ二秒にも満たない程度の時間の後、彼らの視線が交錯した。

そこにいたのは、女ではなかった。見た事もない人間の男が数人、乱暴に夜の静寂を引きちぎってやって来る。

彼は一瞬で悟っていた。奴らは危険だと。彼に気付いた人間の一人が何やら叫ぶように大声を上げた。それが笑い声だと気付けたのは、単に遠目にも分かるほど、彼を見る人達の雰囲気は愉悅に歪んでいたからだけだ。彼はあんなに汚い笑声を発したりはしない。

逃げようと思った。ここについては危険だと、彼の経験と本能は見事な一致を示していた。だから彼は即座に立ち上がった。幸い、奴らとの距離はまだ近くない。今なら十分に逃げ切れるだろう。そして彼は冷静に、その四肢に力を込めてベンチから――

：もしかしたら、ここから離れた直後に、あの女が現れるかも知れない。

彼が動きを止めていたのは、ほんの刹那にも満たない程度の時間だけだった。だから、まだまだ十分に時間も、距離も残されているはずだった。そして彼は急いでその場を離れようとした。寸前、鼓膜が大気の震えを共有した。

自らにぶつけられたものの正体を彼が悟つたのは、体内で響いた鈍い音に骨が砕けた事を悟つたのと全く同時だった。半ば以上に中身の残ったコーヒー缶はまだ熱いほどで、神経は冷たさに麻痺する事さえ許されなかった。

小さな体が宙を舞い、やがて地面へと叩きつけられる。瞬間的に暗転した視界の彼方から、狂った笑声が幾重にも届いて彼の耳を犯してきた。呼吸さえ出来ない痛み、のせいか、それとも腐った欲望に触れたせい、胸の底から強烈な吐き気が込み上げた。

人間達が喝采を上げながら、地面に転がった彼のの下へと駆けて来る。辛うじて意識を維持していた彼は、必死に立ち上がる。けれど、体が震えて上手く力が入らない。懸命に足掻く彼の周りを四人の若者が取り囲んだ。

と、いきなりその内の一人が膝を曲げて、そんな彼の方へと手を伸ばしてきた。そして彼は、その手の行方を目で追って……

男が躊躇なく彼の尻尾を握って持ち上げた。

反転する視界。急な重力変化に沸き上がる不快感。引きちぎれるのではないかとさえ思える尻尾の激痛。：直後に迫り来る、地面。

鈍い、何か決定的な音が、彼の脳に直接に届いてきた。

最早、悲鳴を上げる気力すらなかった。残っていたのは虚ろな諦観、もう好きにすれば

いい。幸いな事に、痛覚もいつしか消えていた。

果たして、それからどれほどの時が経った頃だったのか。おそらくそんなに長くもなかったのだろう。散々に弄ばれた彼の命が、それでもまだ完全に失われる前だったのだから。雨が降ってきた。

動けぬどころか痛みさえ麻痺した体に、何故だか冷たい雨が心地よい。地面を叩く大粒の雨音の向こうから、人間達の声がうっすらと聞こえ、やがて消えた。遊び飽きた玩具に見向きもしない子供さながらに、人間達は彼などまるで存在していないかのごとく無視して去った。彼は己が死ぬのだと悟っていた。

ああ、やはりな。彼は唐突にそう思った。やはり、体は軽いままを保っていなければならなかった。それなのに、一瞬でも余計なものを内に残してしまっていたから。だからこんなにも容易く逃げ遅れる。ただ、生きてきて。ひたすら、生きてきて。やがて行き着いた先がこんなものだとは。なるほど、無様な野良猫にはお似合いの結末なのかも知れない。

そう考えた途端、彼は思わず表情を歪め……ようとしたけれど、すぐに表情を消した。果たして彼は笑おうとしたのか、それとも泣こうとしたのか。結局はそのどちらも出来ず、彼自身にもその答えは分からずじまいだった。

と、そんな彼の意識の上に、突然に映像が浮かんできた。それは、女の泣き笑いの顔だった。やがて、女の表情はくるくると変わる。泣き顔に、虚ろな顔に、それから笑顔に。

彼は思わず笑ってしまいそうになった。生きてきて、ひたすら生き延びてきて、最後の最後に思い出すのが、あんな些細な出来事とは。ましてや、生きる事を終えるきっかけの一つにもなった出来事とは。

けれど、何故だろう、嫌な気持ちではなかった。それは多分、彼にも「思い出せるものがあった」という事が、きつと少なからず嬉しかったからなのだろう。他に思い浮かべられる事なんて、ましてや思い浮かべたい事なんて、たった一つもありはしないのに。

「……………」

不意に、彼の耳に女の声が聞こえた気がした。遂に幻聴まで。だけど、幻聴ならば、せめて最後まで消えないで欲しいと――。

幻ではない、確かな力が、彼の体をしっかりと支えた。

急に地面を離れた感覚に、いつの間にか閉じていた目を開く。

ぼんやりと浮かぶ視界。女が泣きながら、ずっと何かを叫んでいた。雨滴の跳ねる足下には、色鮮やかな傘と、買ったばかりなのだろう真新しいキャリーケースと、それから小さな紙袋。濡れて破れた紙袋の隙間から、赤く小さな首輪が見えた。

彼は驚いた。女がいた事に、ではない。そもそも幻かも知れない。だとすれば、女が此処にいたって何の不思議もない。だから彼が驚いたのは、別の事。

…その女は何故、泣いているのか。

彼には分からなかった。ただ、分かつという気もなかった。そんな事がどうでも良くなるほど、不思議な穏やかさを感じていた。

痛みさえ麻痺した体のはずなのに、女の手感触が分かる。

…温かくて。…柔らかくて。…優しくて。…安らいで。

女が必死の形相で何度も何度も叫んでくる。泣きながら何度も何度も叫んでいる。冷たい雨が降る中で、それでも彼は思わず笑いそうになった。

本当に人間はおかしなものだ、野良猫に言葉など通じはしないのに。

だからこそ、彼は目の前の頬を舐めた。やけに体は重かったけれど、それでも何とか首を伸ばして、その濡れた白い頬を舐めた。もう泣き止めよと頬を舐めた。

彼はやはり猫なのだ。だから泣くか笑うしか出来なくて。だから彼は笑っていた。

そもそも、何の為に紡がれる日々か、何処へ向けて続けられる時間か。そんな事、考えた事もなかったけれど。でも、その果てに待っていたものがこんな温もりであったのだとすれば。それも案外、悪くはないだろう。

雨はもう、止んでいる。

〈了〉